



サーミを捨ててサーミを生きる

庄司 博史
民博 名誉教授

この映画を見終えた後、塞いだ気分が回復するまでしばらくかかったことをおぼえている。先住民族としてのサーミ人が国家の近代化のもとで受けてきた苦悶差別を、これほどの現実感をもって辛く悲しく描いた作品は初めてであった。

北欧の山地でトナカイを追う遊牧民として時折、牧歌的に紹介されるサーミ人。だが、彼らが北欧各国の近代化のなかで経験した試練は、地球上、各地で国家と多数派による支配や同化の構造が先住民に対してもたらしてきたものと大きく変わるものではない。サーミの歴史や文化にいくばくか興味をもつものには、作品のなかで展開する一連の挿話も、すでに史実として語られてきたものでもある。しかし、映画という仮想現実とはいえ、少女という一人の人格を通じてそれらを追体験するのはやさしいことではなかった。

「サーミ」を捨てるエレマルヤ

舞台は一九三〇年代のスウェーデン・ラップランドで、サーミ人がまだ盛んであったトナカイ遊牧に家族とともに従事していたころの話である。一四歳の主人公エレマルヤは、山地でテント生活をおくる家族からはなれ、夏からの数カ月サーミ人の子どものためのサーミ学校で妹とともに寄宿舎生活を過ごす。当時

サーミ人に対し独善的な隔離政策をとっていたスウェーデン政府は、彼らを遊牧者としてサーミ人の村にとどまらせる一方、子どもたちにはスウェーデン語を強要し、口をついて出たサーミ語にはスウェーデン人の女性教師が容赦なく鞭の罰を与えていた。

村民の嘲笑の視線のもと、厳格な寮生活で子どもたちがサーミ人であることに萎縮していくなか、教師を志すエレマルヤは、都会ウプサラへの進学を希望する。しかし、サーミ人は文明には適応できないとされていた当時、彼女にとって都会での進学の道は閉ざされていた。故郷とともにサーミ人であることを捨てる決心をした彼女は、名を変え、仲間のサーミ人



文中であげた出版物に典型例として掲載された北方人種、東バルト人種、サーミ人(左より)。体格の違いを強調する写真が恣意的に選定された
出典：H. Lundborg & F. J. Linders (1926) *The Racial Characters of the Swedish Nation*. *Anthropologia Suecica* MCMXXVI, Plate XLI.

られる。彼女の屈辱的な表情にはすでに権力に抗えないサーミ人から離脱する決心さえも感じられる。

スウェーデン全土をカバーした調査はゲルマン人のなかでもっとも純粋とされた北方人種を頂点とする国民の人種分類の基礎となり、知能や性向、社会階層へと関連付けられていた。その過程で出された、サーミ人は頭骨の構造から文明にはなじめないという結論が当時の隔離政策の原因ともいわれ、東バルト人種に分類されたフィンランド人も二級人種の扱いを受けている。研究所のゲルマン人種に関する研究成果はやがてドイツの人種論のモデルになったとされるが、このような人種学の潮流は当時としては決して異端視されていたのではなく、むしろ時代の先端をいく科学とみなされていたようだ。研究所の代表的な出版物(一九二六年)にむけた『アメリカンアンソロロジスト』の書評はその実証性を評価するだけでなく、人種生物学研究所設立議案を投票なしで通過させたスウェーデン議会の英断を絶賛している。

この映画は、サーミを捨ててクリスティーナと名を変えた彼女が約六〇年後、妹の葬儀におとずれた故郷でふとよみがえる過去からかつての自分を追想していく形で展開するが、スウェーデン人として生きた六〇年間に何が起こったかは語られない。しかし妹の葬儀の場でサーミ語を拒否し、親せきと交わろうとしない彼女がすべての過去と絆を捨てて生きようとしてきたことは想像に難くない。彼女がかたくなに守ってきた「サーミを捨てる」という決心のみが彼女のサーミへのこだわりを語っているのかもしれない。



右：あこがれの都会ウプサラでのエレマルヤ
下：サーミ学校の子どもたち
(いずれも映画「サーミの血」より、
©2016 NORDISK FILM PRODUCTION)



を蔑むことでスウェーデン人社会へとけ込もうとする。しかし必死の努力にもかかわらず、彼女の外見とそれに対する好奇の視線はどこまでも付いて回る。匂いを消すため湖で髪とうなじを洗い、ことばを纏えない感情を即興的に表現できる叙情歌謡、ヨイクも封じることと出自とサーミとしての背景を消そうとするエレマルヤに痛々しさを禁じえない。

スウェーデンの大罪

かつてサーミ人にむけていた民族差別政策は、今日、民主国家・福祉国家と評されるスウェーデンの歴史的汚点としてしばしば言及されており、現在、移民や少数派に対し進める寛容政策は過去への反省と贖罪ともいえる。しかし、スウェーデンがそれにとどまらない人類の尊厳にかかわる大罪に加担していたことは、この映画の潜在的なテーマとなっている。

サーミ学校の子どもたちは突如ウプサラからの来客を迎えさせられる。優生学と人種生物学の立場から健全な国民を守るという名目で一九二二年ウプサラに設立された人種生物学研究所の職員であった。子どもたちは家畜のように機器で鼻の高さや顔の幅などあらゆる身体数値を計測され、スウェーデン人の少年たちの視線を浴びるなかエレマルヤも衣服をはがされ写真を撮